

ラーマースジャの出家遊行論

木 村 文 輝

I. 解脱を獲得するためにブラフマンの明知 (vidyā) が不可欠だということは、『ブラフマ・スートラ』以来ヴェーダーンタ学派の中で一貫して認められてきた。しかし同学派の諸学匠は、ブラフマンを如何なる存在とみなすかという根本的な問題との関わりの中で、この明知の内容を様々に解釈している。

例えば、8世紀前半に活躍したシャンカラ (Śaṅkara) は、ブラフマンとアートマンとの同一を説くウパニシャッドの立場を極限まで追究した結果、ブラフマンは如何なる属性をも持たない永遠不変の唯一の實在であり、非人格的な純粹精神 (caitanya) だと考えた。そこで彼は、このようなブラフマンを直観によって「知る」ことが「明知」であり、それは誤った認識 (無明) のために仮設されたブラフマンの姿の瞑想 (dhyāna) や念想 (upāsana) とは全く異なると主張した。更に彼は、明知そのものが輪廻の原因である誤った認識を根絶し、解脱をもたらす直接の原因だと説いた上で、一旦生じた明知は「一定不変のもの (ekarūpa)」(BSBh II.1.11) として、全く増減しないと論じている。

一方、11世紀の南インドに登場したラーマースジャ (Rāmānuja) は、人格神を崇拜する当時の民衆のバクティ運動に共鳴し、無数の優れた属性を有する最高人格神をブラフマンと同一視した。そのために、彼はこの最高神の具体的な姿の瞑想や念想こそが「明知」であり、それはバクティの最高の現れであると規定した。その結果、彼の説く明知は一定不変のものではなく、むしろ「日々実践されるべきものであり、反復によって卓越性の増大するもの」(ŚBh I.1.1) だと考えられた。しかも、解脱は明知によって直接生み出されるのではなく、明知に対する最高神の恩寵によって死後に授けられると彼は主張したのである。

このように、諸学匠が説く明知の性格は、彼ら自身によるブラフマンの解釈にもとづいて決定された。そして、この明知の性格が、解脱のために諸行為が果たす役割や、解脱を希求する者が選択すべきアーシュラムをも決めることになった。本稿では、こうした問題に対するラーマースジャの見解を、彼が最も主要な論敵とみなした不二一元論学派の開祖であるシャンカラのそれと比較しながら明

らかにする。その上で、一切の諸行為から離れた遊行生活を、ŚBh の中で時には肯定し、時には否定するラーマヌジャの真意を解明することにした。

Ⅱ. まず始めに、諸行為が解脱のために果たす役割を考えてみよう。シャンカラとラーマヌジャは、いずれもヴァルナやアーシュラマによって自らに義務づけられた諸行為を、果報に対する執着から離れて実践するというカルマ・ヨーガが、明知の生起にとって有益であることを承認している。

ただしシャンカラによれば、あらゆる諸行為は誤った認識のために身体や感官等がアートマン (=ブラフマン) に附託された結果として行われるものであり、本来的に明知とは相入れないものである (BSBh Ⅰ.1.1)。したがって、誤った認識を止滅する明知、すなわちブラフマンを「知る」ことが、諸行為によって直接生み出されることはあり得ない。そこで彼は、カルマ・ヨーガには自己を浄化し (BSBh Ⅲ.4.34)、明知に対する欲求 (vividhiṣā) を生じさせる働きがあると考えた (BSBh Ⅲ.4.26-27)。そうすることによって、シャンカラはカルマ・ヨーガを明知の生起の間接的な原因とみなし、既に明知に対する欲求や明知そのものを獲得した者に対しては、一切の諸行為を放棄して遊行生活に入るべきことを説いたのである。

これに対して、ラーマヌジャはカルマ・ヨーガを明知の生起の直接的な原因と考えた。すなわち、彼は自らに義務づけられた諸行為の実践を最高神の命令とみなし、それに従うことは最高神を喜悅させること (ārādhana) だと規定している (ŚBh Ⅱ.2.3)。その上で彼は、これらの諸行為をカルマ・ヨーガとして実践すれば、それに喜悅した最高神が自らの恩寵として明知、すなわち最高神を対象とする瞑想を授けてくれると説いたのである。次の一節を見てみよう。

「このような本質を有する瞑想 (dhyāna, 明知) は、日々実践されている日常的、および臨時の諸行為という、最高者 (神) を喜悅させることを本質とするものによって「喜悅した」最高者の恩寵によって生ずる。」 (ŚBh Ⅲ.4.26)

したがって、未だ明知を獲得していない解脱の希求者がカルマ・ヨーガを放棄することはできない。更に、ラーマヌジャが説く明知は「死に至るまで修練によって卓越性が増大して行くものであり、日々生み出されるものである。故に、それ (明知) の生起のために、アーシュラマ [に規定された] 諸行為も日々必ず実践されるべきである」 (ŚBh Ⅳ.1.16)。そのためにラーマヌジャは、既に明知を獲得した解脱の希求者であっても、生きている限りカルマ・ヨーガを実践し続けることが必要だと繰り返し主張しているのである。

Ⅲ. では、それぞれのアーシュラマの中で、具体的にはどのような行為が義務として規定されているのであろうか。次に示す聖典の一節に注目しよう。

「ダルマに3つの部門がある。供犠、ヴェーダの学習、布施が第一である。苦行こそが第二である。梵行者として師匠の家に住み、常に自らを師匠の家に留めることが第三である。これら全ての者には福德ある世界（天界）が生ずる。[一方]ブラフマンに住する者は、不死性（解脱）を獲得する。」(*Chāndogya Upaniṣad* Ⅱ. 23.1)

シャンカラとラーマヌジャは、この一節における「梵行者」という表現が学生のアーシュラマを表しており、「供犠、ヴェーダの学習、布施」という部分が家長のアーシュラマを表していることを一致して認めている。しかしながら、二人の見解は「苦行」と「ブラフマンに住する」ことの解釈を巡って対立する。

まずシャンカラによれば、「苦行」は林棲者に特有の義務であり、「ブラフマンに住する」ことは、諸行為の放棄と感官の制御とを特徴とする遊行者のみに固有のダルマである。そこで、彼は上記の一節を、学生、家長、林棲という「はじめの3つのアーシュラマに属する者達は福德ある世界を享受する。[一方]残りの遊行者のみが不死性を享受する」と解釈した(*BSBh* Ⅲ. 4.20)。それによって、シャンカラはこの聖典の一節を、解脱を希求する者は一切の諸行為を放棄した遊行者でなければならないという自説の根拠として利用したのである。

それに対して、ラーマヌジャは「両者（林棲者と遊行者）にとって苦行が最も重要だ」との考えから、先の聖典中の「苦行」という語は林棲と遊行という2つのアーシュラマを示していると主張した(*ŚBh* Ⅲ. 4.19)¹⁹⁾。ただし彼は、「苦行(*tapas*)」という語によって肉体を痛めつける超人的な行法ではなく、むしろ世俗的な様々な欲望の放棄を表現していると考えられる²⁰⁾。このことは、「苦行」を唯一の義務とする「遊行者にとっての必須の義務」が、「バラモン達は息子を得たいという願望や、財産を得たいという願望や、[天]界を得たいという願望を捨てた後に乞食を行う」(*Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* Ⅲ. 5.1)という一節から理解されると説く彼の記述(*ŚBh* Ⅲ. 4.48)から窺われる。更に、世俗的な欲望はアートマンとは異なる存在である身体の快楽を目的とするものであり、そのような欲望を否定することは、身体が享受すべき快楽を否定することである。そのために、彼はこれを「身体を苦しめること(*kāyakleśa*)」(*ŚBh* Ⅲ. 4.19)、すなわち「苦行」と呼んだと推測されるのである。

ラーマヌジャは、「苦行」という語をこのように解釈することによって、ダルマの「3つの部門」が4つのアーシュラマを表していると解釈した。その上で

「ブラフマンへの専心が欠けており、単にアーシュラマに属しているだけの者（アーシュラマの義務を遂行する者）は福德ある世界を享受する。一方、彼らの中でブラフマンに専心する者は、不死性を享受することになる。」（ŚBh Ⅲ. 4. 19）

ただし、ラーマヌジャの著作をひもとくと、彼は明知を保持する者に対してさえ、遊行生活よりもむしろ家長生活を奨励している印象を強く受ける⁹⁾。その根拠は、彼が家長の代表的な義務である供養の実践を、神の意志にもとづく世界の運行の一環とみなしたために、供養の実践を非常に重視している点にある⁹⁾。そして事実、彼は ŚBh Ⅲ. 4 の中で、供養を実践している家長であっても、遊行者と同様に明知を獲得できることを繰り返し説いている⁹⁾。また、『ブラフマ・スートラ』の中で、明知を獲得した者による諸行為の放棄を伝える聖典の存在が指摘されているのに対して、ラーマヌジャは、その際に放棄されるべき行為は果報への執着と結び付いた供養等であり、執着から離れた供養等はむしろ実践されるべきだという独自の注釈を施している(ŚBh Ⅲ. 4.9)。これらのことから、彼が供養の放棄を積極的に勧めていないことが窺われるであろう。ここには、明知は諸行為の実践と相入れないものだと説くシャカラに対する反論と、明知の卓越性を日々増大させるためにはカルマ・ヨーガの実践が不可欠だというラーマヌジャ自身の教説とが反映されているのである。

「それ故に、バラモン (brāhmaṇa) は学匠性 (pāṇḍitya) を得た後に、幼児性 (bālyā) に留まろうとするべきである。また、幼児性と学匠性とを得た後に、[そのバラモンは]

聖者 (muni) になる。」(*Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* Ⅲ.5.1)

ラーマヌジャは、ここで用いられている「バラモン」という語を「明知を有する者 (vidyāvat)」と解釈した。更に彼は、学匠性、幼児性、聖者性 (mauna) という3つの概念を、次第に卓越性が増して行く明知の段階と理解したようである。特に聖者性に対しては、「念想の対象を何度も繰り返し思い描くこと」であり、「深い瞑想 (nididhyāsana) という明知に到達するための……ブラフマンの思念 (manana)」であるという解説を行っている。その上で彼は、これらの3つの状態を適切な方法によって順次獲得した「バラモン」は、「それによってしか達成され得ない最高の明知 (vidyākāṣṭhā) を獲得する」と主張した (ŚBh Ⅲ.4.46)。これらの内容をまとめると、深い瞑想 (nididhyāsana) こそが最高の明知であり、それを獲得するための直接の原因は聖者性にあることが判明する。

しかも、ラーマヌジャはこの聖者性に関して、実に興味深いことを述べている。それによれば、聖者性は「遊行者 (pārvirāja) の義務の実践を原因として」おり、「乞食生活 (bikṣācāraṇa) を前提とする」ものである (ŚBh Ⅲ.4.48)。このことは、遊行生活に入らない限り、聖者性を獲得することも、それを前提とする最高の明知を獲得することも不可能だということを意味している。表面上は家長生活を推奨しているラーマヌジャも、その真意としては、遊行生活こそが解脱を希求する者にとっての最高のアーシュラマだと考えていたのである。

では、なぜ彼は明知を保持している者に対してさえ、遊行生活ではなく、むしろ供養の実践を義務とする家長生活を勧めたのであろうか。この問題に対する一つの回答として、既に明知を獲得していながらも、それがまだ学匠性や幼児性の段階に到達していない者にとっては、明知の卓越性を増大させるために供養の実践が不可欠だということが挙げられよう。更に、遊行者の唯一の義務が「苦行」、すなわち様々な欲望の放棄であるならば、遊行者がほんのわずかな欲望を抱くことでさえ、それはアーシュラマの義務に違反することになる。したがって、遊行者の守るべき義務がたとえ「苦行」だけであるとしても、それは他のアーシュラマの義務に比べれば、はるかに厳しいものだと言えるであろう。だからこそ、ラーマヌジャは供養の実践を伴う家長生活を繰り返し推奨する一方で、遊行生活の優越に関しては、あえて強調することを避けたのではないだろうか。

V. とは言え、以上の事柄から、ラーマヌジャが遊行生活を是認するヴェーダーンタ学派の伝統に従っていることは確かである。そして、最高の明知は遊行者にしか獲得できないという彼の主張は、諸行為の放棄と感官の制御とを特徴と

する遊行者のみが明知を保持し得ると説くシャンカラの教義と、ある意味では共通するものと言うこともできるのである。

しかしながら、ラーマヌジャはブラフマンを最高人格神とみなし、明知を最高神の瞑想と規定した。更にこの明知は、家長の義務である供養を代表とするカルマ・ヨーガに喜悅した最高神の恩寵によって授けられ、その卓越性が増大していくものである。それ故、ラーマヌジャは一般論として、解脱の希求者は明知の有無に関わらず、家長生活を継続するべきだと説いたのである。彼のこのような教説は、ブラフマンを非人格的存在と考えたために、ブラフマンを「知る」ことこそが明知であり、この明知を保持する者は直ちに遊行生活に入るべきだと説くシャンカラの教義との間で、明らかな相違を示すものであった。

しかもシャンカラによれば、明知の生起そのものが解脱の獲得を意味するために、明知を有する遊行者には最早遵守するべき義務がない。これに対して、ラーマヌジャが説く明知は、あくまで最高神の恩寵によって解脱を授かるための手段である。故に、最高の明知を保持する遊行者であっても、生きている限り「苦行」という義務を負い続けなければならない。ラーマヌジャは、遊行者も解脱を希求して自らに課せられた修練を日々繰り返すという点では、明知を保持しながら他のアーシュラマに属する者と同じ次元に位置していると考えたのである。

BSBh: Śaṅkara's *Brahmasūtrabhāṣya* ad *Brahmasūtras*. (ed. by J.L. Shastri, *Brahmasūtra-Śaṅkarabhāṣyam*, Delhi: Motilal Banarsidass, 1980.)

ŚBh: Rāmānuja's *Śrībhāṣya* ad *Brahmasūtras*. (ed. by R.D. Karmarkar, *Śrībhāṣya of Rāmānuja*, 3 Parts, Poona: University of Poona, 1959-1964.)

1) Rāmānuja は、林棲者に関する詳しい言及をほとんど行っていない。

2) ただし、欲望の放棄は他の āśrama に属する解脱希求者にも必須の実践目標である。

3) この傾向は、家長生活と遊行生活をともに肯定する *Brahmasūtras* の注釈である ŚBh よりも、karma-yoga を強調する *Bhagavadgītā* に対する彼の注釈の方に顕著である。

4) 詳しくは拙稿「ラーマヌジャにおけるジュニャーナ・ヨーガ (1)」『東海仏教』38, 1993, pp. 50-48 を参照されたい。

5) 特に ŚBh Ⅲ. 4. 26, 27, 47 を参照。なお、Rāmānuja は ŚBh Ⅲ. 4. 17, 25 で供養の放棄を容認しているが、これらは *Brahmasūtras* の記述に従った結果である。

〈キーワード〉 ラーマヌジャ、シャンカラ、アーシュラマ、明知、遊行

(愛知学院大学非常勤講師)